

2019（平成31）年度

2日〔**〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十二ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入**すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消す**こと。
- 8 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

しない。このような難問は国家レベルの政策にも現れる。現代社会では、われわれがいかなる価値をどの程度守ろうとしているのか、常問われているのである。

この大規模書店の店主の悩みは、自由をめぐるひとつのディレンマ注（あるいはトリレンマ）を具体的に教えてくれると同時に、自由はわれわれにとって大切な価値であるが、いくつかの価値のひとつにすぎないという事実も語っている。

ときに自由と鋭い対立関係に入る「平等」もひとつの価値である。「平等」を徹底するうちに自由が侵食される社会でも、民主主義を高らかに標榜ひょうぼうすることがある。社会主義国の多くが「民主主義」を国名の中に織り込んでいることにもそのことは現れている。他方、自由民主主義（リベラル・デモクラシー）の政治体制は、自由を優先しつつ、自由がもたらす歪みゆがみを「平等」という価値の視点から補正するという政策を展開する。いわゆる先進諸国の多くはこのリベラル・デモクラシーの下にある国々であり、その社会は自由社会（free society）と呼ばれる。その自由社会のなかでも、さらに様々な価値意識を持つ人々が生活している。そこでは異なる価値序列をもつ人々が時に激しく対立する。しかし **I** 能力でそれらの価値の衝突を解決するのではなく、それぞれの価値を尊重し合い、「共存する意思」を示しつつ知恵を出す最大限の努力をすることによって、どうにかこうにか秩序を保つのがリベラル・デモクラシーという体制なのである。ここでは「**C** なんとか切り抜ける」(muddling through) ための時間と忍耐が求められる。

政治体制、あるいは社会の道徳や慣習は、何が最高の価値たりうるかを問いつつ、複数の価値の衝突をできる限り **II** に解決するために案出された制度とみなすことができる。万全、万能の解はない。妥協と「なんとか切り抜ける」という精神が求められているのだ。もちろん切り抜ける時の指針となるような「理念」は必要なのだが。

監視社会という点で思い出すのは、大学院生時代のスペイン旅行だ。1970年夏、スイス・チューリッヒの航空会社の研究所で3か月ほど実習生（Praktikant）として働いたことがあった。その間、休暇日を利用して、以前から訪れてみたいと思っていたヨーロッパの2、3の国への小旅行を試みた。特に政治に強い関心をもっていたわけではなかったが、スペイン内戦を舞台にしたヘミングウェイ原作『誰がために鐘は鳴る』や、同じ内戦をベースにした『日曜日には鼠を殺せ』などの映画

をアメリカの大学町で観た後だったので、なんとなく「旅への誘い」を感じたのであった。

実際に当時のマドリッドを訪れて、成熟期を過ぎたスペインの「乾燥したような」文化の豊かさと、専制政治に支配された重苦しさを実感することになる。まずプラド美術館のエル・グレコ、ベラスケス、ゴヤの名画が、数多く無造作に展示されていたのには驚いた。壁に立てかけられているような絵もあったからだ。他にも数多くの名画があったものの、あまりの多さに眼に痛みを覚え、全てを観るのは無理だと諦めたことを憶えている。「猫にコバン」ということか。画を観ることが好きではあったが、特にこの画が観たいというはつきりした目的があったわけではなかった。ずっと後になって、エウヘーニオ・ドールス『プラド美術館の三時間』（神吉敬三訳、ちくま学芸文庫）を読んで、マンテーニャの「聖母の死」がプラドにあることを知った。当時はマンテーニャの素晴らしさはもちろん、その名前すら知らなかったのである。

学生の貧乏旅行であったから訪れた場所は限られていた。カステーリヤのアランフェスの王宮、エル・エスコリアルルの修道院など、その偉容に強く心を打たれた。その折に観たものの細部の記憶は今ではほとんど失われている。その他にどこを訪れたのかについての記憶も曖昧だ。旅行中の見聞と会計をメモしていた手帳を、闘牛を観に行った折に紛失したこともあって、このマドリッド滞在の年月日は、プラド美術館で買ったガイドブック（Bernardino de Pantorba. *A Guide-Book to the Prado Museum*）に書き込んだ1970年8月23日ということ以上はわからない。ただラテン・ヨーロッパの骨太な精神文化の醸し出す空気に文字通り「度肝を抜かれた」ことだけははつきりと憶えている。緑の農地の多いフランスから入ると、スペインは乾燥した砂と岩の国という印象があった。そのスペインに、歴史で習った通りの、イスラム、ハプスブルク、ブルボンなど、ヨーロッパの多様な政治と文化がモザイクのように詰め込まれていることを改めて知ったのだ。

当時のスペインは、まだアンチ・デモクラシーのフランコ将軍による独裁体制の下にあった。1936年2月の総選挙で成立した人民戦線政府に対して、フランコはモロッコ軍を率いて反乱を起こす。そしてマドリッド、バルセロナ、カタルーニャの市民の決起に対してナチス・ドイツとイタリアの援助を待んで共和国軍（武装市民と国際義勇軍）の抵抗を封殺、以後スペインは内戦状態に入る。そして1939年4月1日、フランコ将軍はスペイン全土を制圧し勝利宣言をするのだ。この内戦で、

推定50万人が死亡、ほぼ同数のスペイン人が国外への亡命を凶つたと言われる。

筆者が初めてスペインを旅行した1970年時点では、フランクは王政復古のイコウを明らかにしつつ公の場にもはや姿を見せることはなかった（その後長い闘病生活ののち1975年11月に死去している）。しかし当時のマドリッドには、

X ことを実感させるような雰囲気^(ウ)が十分にあった。冒頭に挙げた「書店の万引き対策」が **III** な規模で行われるような「監視」される社会のそれだ。

スペイン広場から遠くないペンションでの夜の出入りは、滞在者の自由^(エ)にユダねられることはなく、またペンション管理者のコントロールの下にもなかった。夜9時（と記憶するが）を過ぎてペンションに戻る場合は、そのペンション付近の街路で大きく手を叩くよう主人から言われた。実際、夜の食事を済ませて宿の近くにたどり着き強く手を叩くと、近くを巡回している警察官が大きなカギの束をぶら下げて現れた。そしてその束の中から逗留^(トウリウ)しているペンションのカギを取り出し、おもむろに扉を開けるのだ。安全と秩序の確保のために、人々（旅行者も含めて）が市民生活における自由の一部を譲り渡す。譲り渡した相手が警察であるから、これを「警察国家」と呼んでもおかしくない。安全と秩序という価値と、自由という価値が両立せず、自由の犠牲のもとに、自由よりもはるかに価値序列の高い「社会秩序」を確保するという政治体制である。

当時、わたしにはG・オーウェル『カタロニア讃歌』に記されたスペイン内戦のイメージがまだ脳裏に焼き付いていた。そのスペインにわずか3、4日滞在しただけであったが、オーウェルが内戦の義勇軍に志願し、ソビエトの援助を得ている人民^(D)政府（共和国政府）内部の権力闘争と、フランク將軍率いるファシスト軍によるスペイン統治の現実が、さして違いないことを実感するくだりを改めて思い出したものだ。「どっちの側も同じように悪い。おれは中立だ」と言いたくなるものの、しかし人が中立ではありえないことも知っている（「スペイン戦争回顧」）。国民のための国民による権力機構が、その国民を弾^(E)圧するという「全体の全体に対する圧政」という逆理を見抜いているのだ。一人の独裁者による専制は古代から存在した。しかし「全体」という独裁者が「全体」を抑圧するのが20世紀の全体主義だ。オーウェルにとっての自由は「意識の領域を拡大すること」であったから、それを狭めようとする全体主義の精神は、いかなる形を探ろうとも敵となるのだ。

(猪木武徳『自由の思想史 市場とデモクラシーは擁護できるか』による)

注 ディレンマ(あるいはトリレンマ)——「ディレンマ」は二つの選択肢、「トリレンマ」は三つの選択肢の中で決める状態のこと。

問一 傍線部(ア) (エ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) シカク

- 1 カクシンをついた質問
- 2 カクチクを乗り越える
- 3 カクシキを尊ぶ家風
- 4 カクメイ的な新技術
- 5 穀物をシユウカクする

(イ) コバン

- 1 ハンドウタイの性質
- 2 ジバン沈下に備える
- 3 食品をハンバイする
- 4 雌雄をハンベツする
- 5 ソウバン解決に至る

(ウ) イコウ

- 1 記録をコウシンする
- 2 コウゲキを命じる
- 3 コウゴの費用にあてる
- 4 社会にコウケンする
- 5 ノウコウな味の料理

(エ) ユダね

- 1 書類作成をイニンする
- 2 強大なイコウを放つ
- 3 イアン旅行に出かける
- 4 専門家にイライする
- 5 交番にイシツ物を届ける

問二 傍線部(あ)

番号を答えなさい。

(う)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その

(あ) ほどほどに

- 1 十分過ぎるほど
- 2 すべて均等に
- 3 それぞれ適度に
- 4 想像以上に
- 5 ほとんどの場合

(い) 無造作に

- 1 工夫して
- 2 慎重に
- 3 順序立てて
- 4 穏やかに
- 5 気を遣わずつかに

(う) おもむろに

- 1 ゆったりと
- 2 自信を持つて
- 3 てきぱきと
- 4 もったいぶらずに
- 5 軽やかに

問三 空欄

I

く

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1 倫理的 | 2 打算的 | 3 化学的 | 4 地域的 |
| 5 調和的 | 6 物理的 | 7 学術的 | 8 国家的 |

問四 傍線部 A 寓意をふくんだ実話とあるが、どういう寓意をふくんでいるのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 大規模書店で客の一举手一投足を監視するのは経済的・技術的に無意味であるということ
- 2 自由社会では、安全や自由といった複数の価値が互いに衝突するので、両立させることは難しいということ
- 3 安全という価値、経済的価値、精神的自由という価値は本来互に対立する価値ではないということ
- 4 大規模書店の経営者の悩みは経済・安全・自由に優先順位を付けることでは解決できないということ
- 5 「万引き」の防止策も国家レベルの政策と同様に、独立した自由の価値として認められるということ

問五 傍線部 B 社会主義国の多くが「民主主義」を国名の中に織り込んでいるとあるが、それによってどのようなことを示そうとしているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 平等だけを追求するのではなく、民主主義の原則に従い自由も尊重する国であること
- 2 自由と平等には優先順位などなく、民主主義国家の下では優劣をつけることは困難であること
- 3 自由民主主義（リベラル・デモクラシー）の政治体制は、理論的には社会主義社会に劣ること
- 4 民主主義にとつての自由と平等は、単なる理想ではなく具体的な実現目標であること
- 5 平等という理念にだけとらわれ、自由という人間本来の欲求を見落とした国家に未来はないこと

問六 傍線部C ここでは「なんとか切り抜ける」(muddling through) ための時間と忍耐が求められるとあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自由社会でも社会主義でも自由か平等のどちらかを必ず選ばなければならないから
- 2 自由社会においては、複数の異なる価値基準の中から最もすぐれたものを選ばなければならないから
- 3 社会主義国と先進国が共存する意思を互いに共有するためには最大限の努力が必要だから
- 4 自由が侵食されても平等を徹底する社会では、異なる思想を持つ人々が激しく対立するから
- 5 自由社会ではそれぞれの価値を尊重し合い「共存する意思」を示して最大限の努力をすることが必要だから

問七 空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自由の保護によって秩序が維持されている
- 2 国家の危機的状況を終息させるのが喫緊の課題である
- 3 人件費を顧慮せず警備員を多数配置する方法をとった
- 4 監視社会の終末が間近に迫っている
- 5 力による秩序維持が自由の犠牲の上に成り立っている

問八 傍線部 D 人民政府（共和国政府）内部の権力闘争と、フランコ將軍率いるファシスト軍によるスペイン統治の現実が、

さして違いがないとあるが、なぜ G・オーウエルはそう考えたのか。その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 言論による権力獲得のための闘争においても自由を犠牲にした暴力による統治においても、安全と秩序という価値と自由という価値が両立しないから
- 2 人民政府（共和国政府）内部の権力闘争もファシスト軍による支配・統治も、人間の平和への意思や願望の現れという点では同じであるから
- 3 オーウエルが志願した義勇軍の兵士もそれに対するファシスト軍も、人は内戦においてどちらの側にもつかないという中立を主張することは許されないから
- 4 共和国政府の側もファシスト軍も、内戦という権力闘争において、はるかに価値序列の高い自由を求める点で共通しているから
- 5 人民政府の内部闘争もファシスト軍のスペイン統治も、暴力や権力の行使によって意識の領域を狭めようとする点では同じであるから

問九 傍線部E「全体の全体に対する圧政」という逆理とあるが、なぜ筆者は「逆理」と表現しているのか。その理由の説
明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ファシスト軍と人民政府とが連携し、国民の自由や人権を奪うことになるから
- 2 国民が一体になってファシスト軍の権力を監視下に置き、その自由を奪うから
- 3 国民自らが国民のために運営する権力機構が、国民の自由を奪ってしまうから
- 4 国民を統治・支配するための機構が、逆に国民の手によって奪われてしまうから
- 5 国民のための国民による権力機構が、少数者のための権力機構に変質するから

問十 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 自由は我々にとって大切な価値であるが、いくつかある価値の一つにすぎず、これを過大に評価することで政治的な混乱が起きると言われている
- 2 自由社会には様々な価値意識を持つ人々がいるので、共存するためには経済・安全・自由に優先順位を付けなければならぬ場合もある
- 3 政治体制あるいは社会の道徳や習慣は、何が最高の価値たり得るかを問いつつ、それを見つけて出す「理念」の確立が必要である
- 4 安全と秩序を確保するために自由を犠牲にし、自由よりもはるかに価値序列の高い「社会秩序」を確保するという政治体制が警察国家である
- 5 社会主義国においては自由は平等に侵食されるが、自由社会においては自由と平等が対立することのない政治体制が確立している
- 6 「全体」という独裁者が「全体」を抑圧するのが20世紀の全体主義であるとすれば、当然、21世紀にはその論理は消滅するはずのものである

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

科学者が時間や空間の概念を用いて世界を記述し、説明する以前に、社会生活のなかに時間は存在する。物理的世界や生命のなかには「時間」によって記述され、説明される変化や状態はあっても「時間というものは存在しないが、社会のなかには「時間」があるのだ。それは、「時間というものが人びとの生活の営みと共にある社会的なものである、ということだ。

「時間というものは、「物」のようには存在しない。私たちの身のまわりに空気や川の水があるように、そしてまた椅子や机や犬や人間の身体があるように、「時間というもの」があるのではない。そこにあるのは、「時間」という概念によって記述され、理解される、物体や生物や出来事の変化や持続である。そのような変化や持続を記述し、理解するために人間は「時間」という概念を作り出し、さらにその使い勝手をよくするために、それに区分を設けたり、計ることができるようにしたりしてきた。そのようなものとして人は時間を概念として定め、使用してきた。ここで「人は……」というのが、個人としての人でないの言うまでもない。人間の集団としての社会が、それぞれの置かれた状況に即して世界のなかに時間を見いだし、定め、利用してきたのである。時間は社会のなかにあり、それゆえ時間は社会的なものなのだ。デュルケム流に言えば、「時間」とはまさに「社会的事実」なのである。

時間が社会的事実であるとして、それはどのように存在するのか。

たとえば、現在の私たちはグレゴリオ暦を使い、標準シゴセン(ア)にもとづく標準時を使って、一日を二四時間に等分し、一時間を六〇分に、一分を六〇秒に等分する時間のシステムのなかにある。日本がそれまでの太陰太陽暦を廃して太陽暦のグレゴリオ暦を採用すると共に、日の出と日没の間の昼と夜をそれぞれ六等分する旧来の不定時法を廃して一日二四時間の西洋式の時法を採用したのは一八七三（明治六）年、標準シゴセンにもとづく標準時の採用は一八七六（明治九）年である。こうした曆制・時法の政府による改変は、時間というものが社会的な制度であることをわかりやすく示している。だが、私たちの日常(B)的な感覚からすると、それらは「時間の計り方」の制度の社会的な改廃を示してはいても、そうした制度によって示される

「時間そのもの」の社会性を示しているようには感じられない。そうした暦制や標準時が存在しなくても、「時間というもの」はそれ以前にすでに存在しているというのが、ごく普通の現代人の感覚であるからだ。

真木悠介は『時間の比較社会学』で、近代人の時間意識や時間感覚の自明性を

II

するために、レヴィーストロー

ス、エリアーデ、リーチ、エヴァンズ・プリチャードなどの人類学や宗教学の成果を豊富に引きつつ、いわゆる「未開社会」の時間が、近代人が自明とする時間のように人間や社会の外側に客観的な流れとして存在するのではなく、人びととそれをとりまく自然の関係や営みに基礎を置き、そうした関係や営みを通じて作られていくものであることを説明している。

a、牛の飼育と利用に生活の経済的な基礎を置くアフリカ・ヌアー族の社会では、「乳搾りの時間に帰ってくるだろう」とか、「仔牛^{こうし}たちが戻ってくる頃、出発するつもりだ」などというように、牛を牛舎から連れ出したり、水を飲ませたり、再び集めたりする活動の区切りや間隔によって一日のうちの時間を示し、考える。また一年は雨季と乾季とそれらの間の移行期の四季に分けられ、その一年は私たちと同じ一二の月に分かれているが、それらはその季節に行われる作業などと結びつけて理解されていて、あらかじめ定められた開始や終了の日や期間をもたないという。さらに、より長い時間の隔たりを表す場合には、地域の集団のなかで共通の重要な過去の事項を参照したり、年齢組織体系における年齢組間の距離にゲンキウ^イしたり、親族やリニイジ^{注1}の上での距離にゲンキウしたりして、それを表現するという。

このような社会では、時間は社会の外側に、社会生活や社会組織から独立するかのような客観性をもって存在するのではない。そこでは時間は、真木も引用したエドモンド・リーチの次の言葉のように、私たちが「社会」と呼ぶ人間の集団の営みのなかに見いだされるものとして存在しているのだ。

われわれは、時間を計ることについて語るが、そうすることはあたかも時間が、計られるのを待っている何か具体的なもののかのように考えることである。しかし、実際には、われわれは社会生活における間隔期を創り出すことによって時間、を創り出すのである。こうするまでは、計るべき時間は存在しなかったのである。

ところで、右の引用でリーチは「計るべき時間」と述べている。人間の社会は数千年にもわたって暦や時計という時間を計る。仕掛けや制度を作り上げてきた。だから私たちは、時間を「計るもの」——あるいは「計られるもの」——と考えがちだ。けれども、そもそも時間は、つねに計られるものとしてあったのではない。昼と夜、春夏秋冬や雨季と乾季、実りの時や戦の日々、牛たちを野に連れ出す時や水を飲ませる時等々の「時」や「時間」は、日々の暮らしや社会的営みのなかで繰り返し現れ、到来し、過ぎ去るものだ。何らかの仕方ですれらを計ることもできるけれど、それを計ることなどなくても、それらの「時」や「時間」は日々の暮らしの営みのなかの出来事としてある。デュルケムが述べたように、ここでは「時間の範疇ちゆうくわうの基底にあるのは、社会生活のリズムである」。

たとえば牛時計なら、牛の活動はそれを飼う人間によってコントロール可能だから、牛を連れ出したり、水飲み場に連れて来たりすることによって、人は「時」を創っているのだと言えそうだ。

b、牛の生理や活動のサイクルとあまりに違ったリズムをとると、最悪の場合、牛は死んでしまうだろうから、「牛時計」の時間は牛と人間の関係が創っていると言った方が正確だ。

世代間の距離や、共同体内で重要な事柄として記憶されている出来事によって時間を考えることも、人間が記憶し、物語ることによって時間を創っているのだと言えるだろう。そうした社会生活のリズムの距離や隔たりや期間を計るために、世紀や年や月や日や時や分や秒という単位を設定することを指して、人間が時間の基準と単位を計測によって創り出していると言うこともできる。ここでもまた、人間の生理や成長と衰えのサイクル、世代交代のサイクル、季節の変化などが、人間が時間を創る際の制約条件となっていることは言うまでもない。

では、昼と夜や、季節といった天体の運動にもとづく「時」の場合はどうだろうか？ それらもまた、人間が創っていると
言えるだろうか？

人が「昼」や「夜」と呼ぶもの、つまり日が出て沈むまでの間と、日が沈んで再び沈むまでの間、そして明るさや暖かさや、それに伴う生き物たちの活動の違いは、人が創り出すものではない。だが、人はそれらの違いの特定の様相を取り出して、そ

それを「昼」と「夜」という差異づけられた「時」として言葉にし、対象化し、その差異性と対象性を相互主観的に共有する。^{注2}そして、そのような差異づけられた昼と夜に異なる活動や意味を配分することによって、人間は社会的時間としての昼と夜をも創り出す。「昼」には昼にできる／すべき／することになっている／してはいけない活動があり、夜には夜にできる／すべき／することになっている／してはいけないことがある。そのようにして人は、世界を昼と夜に区切り、その区切りに応じた昼と夜を創り出す。つまり時間は単に言語的な表象を媒介とする世界の意味づけられた区分でなく、それを枠組みとする人間の集団の行為を通じて遂行的^{注3} performative に産出され、現実化するわけだ。

季節についても同様である。テンコウ^(注)の、そしてそれに対応する自然界の変化の特定の様相を取り出し、対象化し、それらを異なる様相によって対象化される別の季節と差異つけて言語的に表象し、そうした季節の区分と対応させてさまざまな活動を配分することにより、人間は季節を創り出すのだ。^E

このように人は社会生活のなかで、自然界の変化・変動の特定の様相や、人生における異なる状態や、集団の営みのなかで繰り返される出来事や過ぎ去った特異な出来事などを、天体の運行や、人間や他の動物の生理や活動や成長・衰退のリズムに規定されつつも、それらと同調したり、協調したりしながら、言語によって相互主観的に対象化し、さらにその相互主観的に対象化された時を枠組みとして社会生活を組織したり考えたりすることによって、時間を社会的世界のなかに創り出す。それは、時間が言語媒介的な制作物であると同時に、人びとの振る舞いを通じて産出されるという点で遂行的な制作物であり、社会的な意味と関係を通じて人びとの社会的な行為の枠組みを作り、拘束するという点で規範的な社会的制度であるということである。

(若林幹夫『未来の社会学』による)

注

- 1 リネージ——共通の祖先につながる意識をもつ親族集団や社会集団のこと。「リネージ」とも言う。
- 2 相互主観的——哲学用語。複数の主観の間で共通して成り立つこと。共通する主観性。
- 3 遂行的——哲学用語。公約などは発言・発話することによって現実の行動になるということ。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) シゴセン

- 1 ゴエツ同舟の状態
- 2 タンゴの節句を祝う
- 3 ゴラク映画を見る
- 4 失敗をカクゴする
- 5 ゴバン割りの区画

(イ) ゲンキユウ

- 1 試験にキユウダイする
- 2 ジキユウ力を高める
- 3 壁にキユウチャクする
- 4 三学年にシンキユウする
- 5 奨学金をキユウフする

(ウ) テンコウ

- 1 急コウバイの坂をのぼる
- 2 この話はコウガイ禁止だ
- 3 年間コウウ量の多い地域
- 4 コウリヨウとした原野
- 5 リッコウホ者による演説

問二 空欄

I

・

II

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 全体化 | 2 | 絶対化 | 3 | 相対化 | 4 | 抽象化 |
| 5 | 象徴化 | 6 | 数量化 | 7 | 流動化 | 8 | 社会化 |

問三 空欄

a

・

b

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|-------|---|---------|
| 1 | たとえば | 2 | なぜなら | 3 | だからこそ | 4 | にもかかわらず |
| 5 | もつとも | 6 | ゆえに | 7 | もちろん | | |

問四

傍線部 A

社会のなかには「時間」があるのだとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択

肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 時間は、社会に生きる人間がそれぞれの置かれた生活や状況に則して用いた私的な概念であるということ
- 2 時間は、物理的世界や生命としての人間の日々の営みから自然に発生した概念であるということ
- 3 時間は、科学者が物体あるいは出来事の変化を記述するために使用した概念であるということ
- 4 時間は、人間の集団である社会の変動や人間の行為を拡張するために用いる概念であるということ
- 5 時間は、人間の集団である社会がそれぞれの生活の必要に応じて定めた概念であるということ

問五 傍線部 **B** 私たちの日常的な感覚とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 時間は、人間が生活を規則正しく送るために社会生活から学ぶものだという感覚
- 2 時間は、人間の生活や社会の外側にすでに客観的な存在として流れているものだという感覚
- 3 時間は、人間の日常生活のなかで意識されることによって発見されるという感覚
- 4 時間は、生活する人間が記憶し物語ることによって創られるという感覚
- 5 時間は、社会に生きる人間がその中に見出^{みいだ}して設定した制度のようなものだという感覚

問六 傍線部 **C** 「計るべき時間」の内容を具体的に示す語句として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 午時計
- 2 日々の暮らしの営み
- 3 雨季と乾季
- 4 暦制や標準時
- 5 共通の重要な過去

問七 傍線部 D 差異づけられた昼と夜に異なる活動や意味を配分する とあるが、これはどういうことを意味しているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人は、自然や物事を言語によって認識して区別し、その言語ごとに異なる社会のあり方を定めたということ
- 2 人は、視覚によって自然現象を認識して区別し、その枠組みに人間の本能的な行動を割り当てるということ
- 3 人は、言語によって世界の事物を対象化して区別し、一つ一つについて集団に共通する概念をつくるということ
- 4 人は、明暗の違いによって一日を二つに区別し、日の出から日没までを昼、日没から日の出までを夜としたということ

5 人は、自然現象を言語によって対象化して区別し、その枠組みに人間の集団的な行為を関係づけるということ

問八 傍線部 E 人間は季節を創り出すのだ とあるが、この具体例として適当ではないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 春になって桜が咲くと、春の行楽行事としての「花見」と称して多くの人々が桜の名所に出かけていく
- 2 年間の気温変化に応じて衣服を替えることを「ころもがえ」と言い、平安時代の宮中行事でもあった
- 3 春が来て植物が芽吹く様子を生命の輝きとしてとらえることで、人間が若く元気な頃を「青春」と称する
- 4 コブシの花が咲くと、それを農家の人は「田打ち桜」と呼び、田植えの準備を始める
- 5 夏が来て気温が上がると、各地の浜辺では「海開き」と呼ばれるイベントが開かれ、海水浴客が訪れる

問九 本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 時間には、人間の社会に存在する時間と、科学者が自らの世界を記述し説明するための時間とがある
- 2 人間は、あらかじめ世界に存在するものとしての時間を、言語によって概念化することで利用してきた
- 3 近代に入って初めて、人間は時間を直線的な流れとして意識し、科学的に考察するべき対象とみなした
- 4 共同体で生きる人々には、共有する記憶としての出来事や血縁関係の距離によって語られる時間がある
- 5 人間にとっての時間は、近代的な社会的制度であるとともに、自らの生理や生命を左右するものである
- 6 時間には、社会の中の人の活動によって作り出される側面もあれば、人の社会的な行為を縛る面も持っている

国語解答用紙 2日 [**]

一

問一	(ア)	① ● ③ ④ ⑤	(イ)	① ② ③ ● ⑤	(ウ)	① ② ● ④ ⑤	(エ)	● ② ③ ④ ⑤
問二	(あ)	① ② ● ④ ⑤	(い)	① ② ③ ④ ●	(う)	● ② ③ ④ ⑤		
問三	I	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑦ ⑧	II	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑦ ⑧	III	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ● ⑧		
問四		① ● ③ ④ ⑤	問五	● ② ③ ④ ⑤	問六	① ② ③ ④ ●		
問七		① ② ③ ④ ●	問八	① ② ③ ④ ●	問九	① ② ● ④ ⑤		
問十		① ● ③ ● ⑤ ⑥						

50点

二

問一	(ア)	① ● ③ ④ ⑤	(イ)	● ② ③ ④ ⑤	(ウ)	① ② ③ ④ ●
問二	I	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑦ ⑧	II	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑦ ⑧		
問三	a	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	b	① ② ③ ④ ● ⑥ ⑦		
問四		① ② ③ ④ ●				
問五		① ● ③ ④ ⑤	問六	① ② ③ ● ⑤	問七	① ② ③ ④ ●
問八		① ② ● ④ ⑤	問九	① ② ③ ● ⑤		

50点